

第1回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

◇日時 2023年5月16日(火) 19時~20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン方式

◇参加者 24名

◇実践報告 沖縄県南風原町立南風原小学校教諭 屋良真弓先生

小学校5年総合的な学習の時間「SDGs メガネをかけたら ~平和学習~」

— 持続可能な社会をつくるためにできること —

【実践概要】

○授業のねらい

第二次世界大戦の戦争遺跡を文化財に指定したのは、南風原町が日本で初めて

沖縄では、唯一地上戦が行われ、慰霊の日がある6月には各学校とも様々な平和学習が行われている
しかし、

- ・慰霊の日が何の日か知らない小学生も少なくない
- ・沖縄が復帰した日を知らない高校生が約7割

平和学習のあり方について議論されるようになってきている

沖縄戦のことを学ぶことは、「人権」「命」に深くつながっていく

「人間らしく生きるとはどういうことか」考える材料が沖縄にはたくさんある

5年生終了時に目指す子どもの姿

「自分たちの住む地域に誇りと愛着をもち、一人一人が平和な世の中を創る主体であることに気づくとともに、多様な人たちと協働してよりよい社会のための行動を自ら起こすことができる」

- ・学校だけに閉じない学び
- ・外部人材の「活用」ではなく「協働」
- ・だれでも再現可能なカリキュラムづくり
- ・ジブンゴトになる工夫（参加型、本物に出会わせる、人と会う）

1. 復帰50周年ワークショップ

「オキナワ」が“日本”にかえった日 ~50年前のオキナワのできごと~

屋良朝苗（初の公選県知事）の半生のストーリーを通して沖縄復帰を考える

復帰前の母子手帳には「琉球政府」と書いている！

新聞記事…復帰式典の行われている隣の公園で大規模集会…『「沖縄処分」響く怒号』

問い 沖縄の人たちは、なぜ怒っていたんだろう

怒りの根底には何があったのだろう

どんな沖縄を望んでいたのだろう

このワークショップ地域の博物館の企画展とタイアップ

2. 私の決めたあの人に会いに行こう

琉球大学アドバイザー事業を活用 大学の先生に授業づくりに参画してもらう

平和祈念資料館、ひめゆり資料館の見学…ぼんやり眺める、何となく見学するを避けたい

「概要を学ぶのではなく、ある人物に焦点を絞って沖縄戦を考えていってはどうか」

まとめ新聞や感想を書かせるよりも、「あの人に手紙を書こう」

もう返事はないけど、聞いてみたいこと、伝えたいこと、自分が考えたことなど

テーマごとに戦没者の方を数名取り上げている小冊子から

→ 平和祈念資料館、平和の礎のどこにその方の資料があるだろう？ 冊子を見て探させる
自決された方 「どうして自分で自分の命をうばっているのかな？」

「赤ちゃんなのに、なぜ？」

自分が探しに行く人を決める

「牛島満さんに聞きたいことがあります。なぜ最後まで敢闘し・・・というような命令を？」

「今ではもう平和です。」

「私が見つかったことは、戦争はとても辛くて、人はひとでなくなってしまうということです。」

「もっと長く生きてかったですか？ 生きていたら何をしたかったですか？」

→ 事実の羅列に終わっていたこれまでの感想から、その人を通して考えた社会的事象への理解や感想、思いなどが書き足されていた

3. 山口県柳井市の小学校とのオンライン交流

山口（日本兵を通して考える）と沖縄（地域住民を通して考える）では、学ぶ側面が違う

学んだ事実と考えたことについて交流

「若い人が、どうせ死ぬのなら役に立ちたいと思い、回天に乗ったと言っていたので、昔はそういう思考回路で、それに加え同調圧力もあると思うので、それなら私も乗るかもしれないと思いました。」

↓

キーワードになった「同調圧力に負けない」について、ジャムボードで意見交流、共有
自分の意志を持つ 勇気 自信を持つ たくさん勉強する・・・

成果 ・コンテンツ、コンピテンシー両方のカリキュラムデザインを意識して考えることで、有機的な教科横断の取組となった

・ESDの資質能力、価値観などを明確にしたことで、教師の働きかけが明確になり、学年単位で取り組むことができた

課題 ・児童の学びのストーリーに乗ったカリキュラムであったか

【質問】

○「同調圧力」という言葉は沖縄の子どもたちからは出なかったということだが、それは沖縄だからという地域的なことなのだろうか？

→ 私自身がそういう視点で平和学習をつくっていなかったと思う。集団自決など悲惨な歴史の事実がどうして起こったのだろうというところまで考えていなかったのは反省点。

柳井小学校の子どもたちは、人間魚雷に乗らざるを得ない状況にあったということを理解しての発言であったと思う。

○地域との連携、外部人材との協働について話があったが、コミュニティスクールなどの沖縄での現状はどうか？

→ 浦添の前田小学校はユネスコスクールのキャンディデート校になって、地域との連携が非常に活発に動いているという話は聞いている。

○「人間らしく生きるとはどういうことか」という問いに対して、屋良先生の捉えはどうか？

→ 平和学習に関して言えば、安心して生きていけること、なりたい自分に向かっていけること
自分は大切にされていい存在なんだと感じられること かな。

沖縄の子どもたちには、やはり沖縄のことをよく知ってほしいと思っている

○平和学習を、総合を中心に取り組む場合、みなさんは大単元としてどのように取り組まれているのか教えてほしい。

→ 修学旅行で広島へ行くにあたり、社会科と絡めている。キャリア教育とも関連させて、「平和な社会をつくるためには、どのような自分を目指すのか」を考えさせている。

道徳でサダコさんの学習をする 千羽鶴を折る

ESD カレンダーに「人権」に関わるものをピックアップして、各教科で行っている。

国語の物語教材をいくつか「命」をテーマに学習している。6年生では社会科や理科にも「命」について考えるものがあり、それらをつなげて長いスパンでやっている。

中学校では沖縄に修学旅行に行く。ひめゆりの女学生と同世代の子どもなので、「やりたいこともできなかった」彼女らに思いを馳せ、「やりたいことができる」自分たちはこれからどう進路を選ぶのかを考えさせたいと思っている。

【意見交流から】

○平和教育の教材として、名もない一人の人に目を向けて、そこから学びを深めていけるというのは、沖縄だからというわけでもないと思う。取り入れてみたい手法だと感じた。

○オンライン交流は、子ども同士の学びであると同時に、先生同士の学びであると実感できた。

○戦争を自分事として捉えるというのは難しいと思う。

語り部さんに来てもらっても、高齢化で厳しいところもある。

屋久島の神山小学校では、モッコム岳に6年生が登る行事がある。険しい山だが、その自然体験から得られる様々な学びを通して感性を養うことが、平和を愛することにもつながるのではないかな。

○外部人材は「協働」であるべき。県をまたいで交流することの大切さを感じた。「同調圧力」ではなく、上からの強制ではなかったか。今の子どもたちは、そういう強制をあまり経験がないので。

○いくらウクライナの様子を画面で見ても、子どもにとってはそれは自分事化はできないだろうし、あくまでも遠い世界のことだろう。意見にあった「感性を鋭くさせておく」というのは大事だと思う。様々な体験を通して感性と磨いておくことで、修学旅行で現地に行っても感じ方が違うはず。

